

生徒文化研究の発展に向けた予備的考察 ——『文化・階級・卓越化』を手がかりに——

Preliminary consideration for developing student subculture studies

知念 渉

Ayumu CHINEN

神田外語大学外国語学部講師

1. はじめに

本稿の目的は、『文化・階級・卓越化』が示している人々の文化実践へのアプローチを手がかりにして、今後の生徒文化研究が向かうべき方向性を探ることである。

日本の生徒文化研究は、戦後の義務教育の普及および高校進学率の高まりを背景に、「成人や子どもと並ぶ独自の意味をもった時期」としての青年期へ注目する必要がでてきた1960年代に、野村哲也(1967)によって行われたことから始まったとされる。その後、高校進学率が90%を超えるようになった1970年代には、高校の学校ランクと生徒文化の関係性があることが繰り返し明らかにされた(米川1978など)。現在の教育社会学研究では、かつてほど生徒文化というワードは使用されなくなったものの、そうした先行研究を手がかりにして生徒の学校経験に迫るような研究は数多く蓄積されている(盛満2011, 知念2012, 土肥2015, 内田2016)。消費社会化の進行によってかつて以上に生徒たちが「若者」としての側面を強め(伊藤2002)、学校から仕事への移行が長期化・複雑化し(宮本2004)、さらに「子ども・若者の貧困」が社会問題化している現代のような状況では、社会状況に影響を受けながらも相対的に自律した生徒たちの文化圏がどのように存立しているのかを明らかにすることが、よりいっそう重要な課題になっていると言えるだろう。

しかしながら、かつてのように学校ランクと生徒の関係に焦点を当ててそ

の分布状況を描くような枠組みがもはや単純にすぎるとは、生徒文化に着目した学校パネル調査によって繰り返し指摘されているものの（樋田・荻谷・堀・大多和編 2014）、それにかわる新しい枠組みを提示するには至っていない。確かに上記のような社会状況の変化のなかで個々の生徒に関する研究は蓄積されているものの、それらの知見を統合したり比較したりする枠組みが十分に用意されているとは言い難い状況なのである。

そこで本稿では、『文化・階級・卓越化』で実践されているアプローチに着目し、生徒の文化に着目した多様な研究を包括して検討するための新たな枠組みを構築する予備的考察を行うことにする。具体的には、以下のように議論をすすめていく。第一に、1970年代に日本の教育社会学領域で蓄積されてきた生徒文化研究をふりかえり、そこで明らかにされたことと課題とされていたことを確認する（第2節）。第二に、1980年代以降の生徒文化研究の動向を確認し、現在の到達点と残された課題について明確化する（第3節）。第三に、『文化・階級・卓越化』のアプローチを参考にして、筆者が行なったX高校中退者・卒業者への質問紙調査によるデータを分析することで、今後、生徒文化を分析していく枠組みの具体的なイメージを提示する（第4節）。

なお、『〈ヤンチャな子ら〉のエスノグラフィー』（知念 2018）という著書において筆者は、社会空間、学校空間、メディア・ストリート空間という3つの力学を重ね合わせて子ども・若者の経験を理解することの重要性を主張したが、その主張は本稿にも通底している。前著との関係で言えば、前著が参与観察・インタビューを用いたアプローチだったのに対して、本稿はそれに質問紙調査を組み合わせて拡張させたアプローチを提示する。筆者の問題意識については、前著の第1章も参照してほしい。

2. 生徒文化研究の興隆——数量化Ⅲ類によるアプローチ

日本の教育社会学では1970年代から1980年代にかけて、生徒たちの価値観や行動様式、すなわち生徒文化に関する研究が数多く蓄積された。そして、その主な焦点は、生徒文化が高校間の格差とどのように関連しているかという点にあった。まずはその具体的なイメージを共有するために、「高校における学校格差文化」（武内 1981）という論文を典型例として紹介しよう。

この論文は、公立普通高校10校の生徒を対象にした質問紙調査の分析か

ら、「入学してくる生徒の質や大学進学率にもとづく学校格差によって、同じ格差同士の学校は似たような校風、学校経営の特色、あるいは生徒文化の特質を持っている」(p.137) ことを描き出そうとするものである。分析の具体的な手順は以下の通りである。まず、生徒の中学時の成績と四年制大学への進学率によって、調査対象となった高校を A、B、C の三つのランクに分けて、そのランクごとに学校の経営方針に違いがあることを確認する。その次に、生徒の行動に関する 20 の質問（肯定・否定に分けて 40 の回答となる）⁽¹⁾ に対して数量化Ⅲ類を行い、生徒を分類する。その結果、学校適応－学校不適応という軸と青年文化志向－非青年文化志向という軸が抽出され、その軸を直交させると、「反抗型」、「孤立型」、「勉強型」、「エンジョイ型」という 4 つの次元に分けた空間を構築する。そのなかに 1 軸・2 軸の得点を学校ごとに配置させると、B ランクや C ランクの高校は、反抗型の次元に、A ランクの高校は「勉強型」の次元に配置される、というわけである（図 1）。

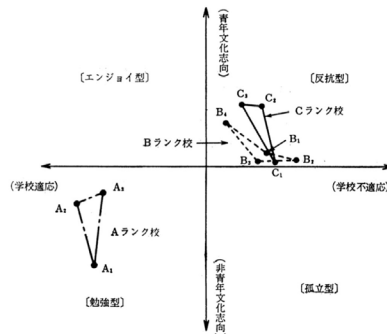


図 1 学校ランクと生徒文化（武内 1981）

さらに武内は、学校ランクを独立変数、中学時の成績を統制変数、生徒の生活・意識を従属変数とする三重クロス表を作成し、中学時代に成績が上位だった生徒でも C ランクの学校に進むとクラブ・部活動へのコミットや反学校意識や深夜放送への関心が高まっていること（＝反抗型になる）、中学時代の成績が下位で背伸びをして A ランクの学校へいった生徒のアスペレーションが高くなっている傾向（＝勉強型になる）などを明らかにしている。つまり、中学時代の成績上の位置を考慮してもなお学校ランクの影響が残ること、いいかえれば、学校ランクそれ自体が生徒たちの生活や意識に影響

響を与えていることを指摘したのである。

この武内の研究のように、1) 生徒たちの生活や意識によって生徒たちを類型化し、2) その類型の割合が学校ランクによって異なることを確認する研究が、1960年代から1970年代には数多く蓄積された。当時の生徒文化研究の動向をまとめた武内・荻谷・浜名（1982）によるレビューに詳しいが、それらの研究は、上記の武内の研究と同様に、たいていは、向学校的－反学校的というフォーマルな学校的価値への距離を示す軸と、他人志向－自分志向のように社会関係へのコミットメントを示す軸が抽出されていた点で分析結果が類似していた（門脇 1978, 米川 1978, 竹内 1995 など）。

このように生徒文化がある程度共通した尺度で類型化できること、そしてその生徒類型の割合が学校ランクによって異なることが複数の研究によって明らかにされたが／からこそ、1980年代に入ると様々な課題が指摘されるようになった。例えば、松原ら（1981）は、当時の生徒文化研究の課題について、次の三点を指摘している。

第一に、生徒文化の定義をめぐる問題である。主にこの問題は、生徒文化という概念によって生徒たちの「生徒」役割に着目するのか、「若者（Youth）」役割⁽²⁾に着目するのか、あるいはその両方を視野に入れることはどのようにして可能か、という論点をめぐって提起された。一言で言えば、生徒文化は若者文化とどう違うのかという問題である。なお、社会における格差や貧困が問題となっている現在から振り返れば、この問題をいち早く指摘した白石（1976）が、Riggleの研究を取り上げて生徒の社会的背景に着目することの重要性を訴えていたことも重要である。というのも、生徒たちの文化を、生徒文化や若者文化に還元できない、階級・階層文化としてみる視点を示唆しているからである。

第二に、生徒文化に関する調査研究が、生徒を対象にした質問紙調査に偏っており、参与観察やインタビューといった方法をほとんど採用していなかったことである。そのため、質問紙調査で見出された類型が、現実の生徒たちの姿と本当に対応しているのかさえわからないので、質問紙調査と並行して参与観察やインタビューが行われるべきだという指摘がなされた。

第三に、生徒文化の類型の析出に力点が置かれている一方、それぞれの類型になぜ、どのように分化するのかという説明が十分になされていないという点である。上述の武内の研究に典型的に示されるように、意識や行動から

生徒たちを類型化できることが度々明らかにされてきた。しかし、それはあくまでも記述のレベルであって、なぜ分化するのかという説明のレベルにふみこまなければならないというわけである。

この論文で指摘されている三つの課題は、その後の研究に方針を与えたと言っても過言ではなく、その後の研究によって、これらの課題はある程度克服されてきた。とはいえ、ここで指摘されている課題が完全にクリアされたわけではない。次節では、主に 1980 年代以降に蓄積された生徒に焦点を当てた研究をふまえて、何が残された課題なのかを明らかにしよう。

3. 生徒文化研究の展開と残された課題

1) 向学校－反学校という一元的な軸への収斂

1980 年代以降の生徒文化研究では、上述した課題をふまえて、重回帰分析によって記述よりも説明に重点を置いた研究が行われ、また参与観察やインタビューといった質的な調査方法を用いた研究が数多く行われることになる。この経緯をふりかえりながら、残された課題を明らかにしていこう。

耳塚 (1980) の研究は、先に指摘した第三の課題に対して先駆的に取り組んだ研究である。耳塚は、それまでの生徒文化研究が「多様な生徒文化の存在形態を記述する段階にとどまっており、なぜ、どのように分化するのかを十分に説明していない」(p.111) と批判し、海外の研究を参考に、向学校－反学校の分化に焦点化し、それを説明するモデルを理念的に抽出した。耳塚が抽出したモデルは、1) 生徒の出身階層に着目する文化衝突モデル、2) 生徒の報酬分配尺度上で占める地位 (例えば成績や学力) に着目する地位欲求不満モデル、3) 個別学校の組織構造に着目する学校の組織構造モデルの三つである。そして、質問紙調査のデータから複数のクロス表を作成して検討し、地位欲求不満モデルが向学校－反学校の分化を説明する可能性が高いと結論づけた。ここで注目したいのは、「向学校的 (pro-school)－反学校的 (anti-school) 下位文化への分化に焦点づけて」(p.112) 分析が行われていることである。前節で紹介したような数量化Ⅲ類によって生徒文化を類型化した論文では、二つ以上の軸が想定されていたが、この論文では、向学校－反学校という一つの軸だけの想定になっているのである。

そしてこの約 20 年後、大多和 (2001) は 1979 年と 1997 年に全く同じ高校を対象に同じ質問項目で行なった調査データを用いて、地位欲求不満モデ

ルの適合度を改めて検討した。本稿の関心からして、大多和の研究で注目したい点は二つある。一つは、「喫煙」、「ゲームセンター」、「パーマ・リーゼント」などへの興味関心を非行的文化と操作的に定義し、それを従属変数とした重回帰分析によって、地位欲求不満モデルの適合度を検討している点である。この分析は、様々な変数をコントロールして検証されているという点で耳塚（1980）の分析よりも精緻化されている一方で、生徒文化を類型化する軸の多元性は想定されていない。先に指摘した課題との関連でいえば、生徒文化の分化の説明を精緻化させる一方で、数量化Ⅲ類を用いて記述に力点を置いていた研究が想定していた軸の多元性は看過されてしまっているということができるだろう⁽³⁾。

二つ目は、1970年代から1990年代への変化をふまえて消費社会からの役割期待＝若者文化と社会階層を分析のモデルに組み込んでいることである。大多和の分析によれば、79年では、どの社会階層においても成績や学校ランクといった報酬分配尺度が有意に非行的文化へのコミットメントの度合いを高めていたが、97年では社会階層が上位の生徒にしか両者の関係が有意ではなくなっていた。さらに、97年の社会階層中位・下位層では、非行的文化へのコミットメントの度合いが報酬分配尺度と結びつかない代わりに、「街でぶらぶらする」「制服も街に行く時のファッションになる」といった若者文化へコミットするか否かが非行的文化へのコミットメントと有意に関連していることを明らかにした。やや複雑な手続きではあるが、要するに、79年時点ではすべての社会階層に地位欲求不満説が適合していたが、97年ではそれが社会階層上位の生徒にしか適合しなくなり、社会階層中位・下位にとってはそれよりも若者文化への接近が非行的文化へのコミットメントと関連するようになった、ということだ。これを大多和は「上層：生徒文化・下層：若者文化モデル」と呼んでいる。このモデルは、社会階層上位層は生徒役割を、下位層は若者役割を重視しているとするモデルで、生徒文化と若者文化、さらに社会階層を組み込んでいるため、前節で示した生徒文化の定義問題に対する一つの対応と考えることができるだろう。ただし、若者文化の指標が「街でぶらぶら」や「制服で街に行く」に限定されているという点や、社会階層下位の生徒も学校に通っているわけでその生徒たちが学校に対してどのような価値づけを行なっているかということについて明らかにされていないという点に課題がある。一言で言ってしまえば、どちらの役割を重視す

るかはあるにしても、どの社会階層の生徒にも生徒役割と若者役割が課されているはずで、大多和の提案したモデルではそうした現実を汲み取れないという問題があるのである。

ちなみに後述する上間（2002）の研究では、この点に関わる興味深い指摘がなされている。すなわち、学校という場こそが、消費社会的な意味でいう「サブカルチャーが生成し、機能し、そして、獲得される主要なアイデンティティ獲得・修正の舞台」（p.55）であるという指摘だ。この指摘は、「学校内部＝生徒文化／学校外部＝若者文化」という従来の想定に疑義を突きつけるものである。この指摘をふまえるなら、生徒文化か若者文化かという二者択一的な問いではなく、両者の関係性をこそ問わなければならないと言えるだろう。

2) 量的研究と質的研究の乖離

さて、1990年代以降には、大多和のような計量的研究だけではなく、生徒に着目したエスノグラフィックな研究も数多く行われるようになった。例えば、宮崎あゆみ（1993）は一つの女子高校でエスノグラフィックな調査を行い、その学校の生徒が「勉強グループ」「オタッキーグループ」「ヤンキーグループ」「一般グループ」に分化し、互いに対立し合う現実を明らかにした。上間（2002）もまた女子高校でエスノグラフィーを行なって一つの学校の生徒文化を描き出した。上間が調査を行なった学級では、生徒が〈トップ〉〈コギャル〉〈オタク〉という三層に分かれ、ヒエラルキカルな秩序をなしていたという。これらの研究は、1980年代まではほとんど行われていなかった参与観察やインタビューを用いて教室で実際に使用されている言葉や行われている行為に着目して、生徒文化の分化を描き出した点に新規性があった。

また、2000年代後半になると、「ニューカマー」や「貧困」、「トランスジェンダー」、「サポート校」といった特定の社会的背景を抱えた生徒たちの学校での経験を描き出す研究も蓄積されるようになった（児島 2006、盛満 2011、知念 2012、土肥 2015、内田 2016 など）。これらの研究は、それまでの生徒文化研究の主眼の一つであった生徒文化の分化に分析の焦点があるわけではないが、生徒たちがどのように学校を経験しているのか、そのリアリティを明らかにしているという点で、生徒文化研究の範疇に含まれるものだと考えることができる。このように考えれば、松原らが指摘した第二の課題

は、ある程度克服されてきたといえることができるだろう。

しかしながら、生徒に着目したエスノグラフィックな研究が個々に蓄積されてきたとはいえ、松原ら（1981）が指摘した方法的な課題を十分にクリアしたとはいえない。というのも、松原らの指摘には、参与観察やインタビューを用いた研究を行う必要性だけでなく、質問紙調査とそれらを組み合わせることが含意されていたからである。このような観点から言えば、1990年代以降、確かに生徒に着目したエスノグラフィックな研究が蓄積されてきたものの、複数の方法を組み合わせて生徒文化にアプローチした研究は十分にない。それどころか、エスノグラフィックな調査で明らかにされた知見と計量的研究で見出された知見を往復・循環させることもほとんどできていないように思える。

その背景に、量的研究と質的研究の間にある認識論的立場の乖離が大きくなった（あるいは明確にされた）ことがあるのは間違いないだろう。質的研究においては、ポスト構造主義、構築主義、エスノメソドロジーの影響を受けて、具体的な文脈のなかで主体がどのように構築されるのかということに分析の焦点が当てられ、「文脈」に重要な地位が与えられるようになった。他方、量的研究は、数量化するために人々の行動や意識の文脈依存性をそぎ落としていくものである。質的研究が蓄積されるようになった1990年代以降、「文脈」に与える重要性において質的研究と量的研究の間には決定的な違いがあることが明確にされていくなかで、素朴に両者の知見をつなぐということは困難になっていったと言えるだろう。

とはいえ、日本の教育社会学における質的研究の全てが、「文脈」に重要な地位を与えて量的研究と相容れない認識論的立場をとっているかというと、そうではないだろう。むしろ、文脈依存性を徹底的に削ぐ研究（＝量的研究）との違いを徹底的に追求している質的研究はそれほど多くないと思われる⁽⁴⁾。そのように考えれば、両者を組み合わせた生徒文化研究がなされてもよかったはずなのだが、そうした研究は十分に蓄積されてこなかった。したがって、1980年代には質問紙調査だけではいけないという意識から教員へのインタビューや学校資料などを用いて多角的にアプローチしている生徒文化研究があったことをふまえると（松原ら 1981, 竹内 1995）、組み合わせるという点においては1980年代よりも後退しているといったほうがいいのかもかもしれない。

3) 生徒文化研究の残された課題

以上、本節での検討をふまえると、1980年代に指摘された課題には現在でも十分に答えきれていないことがわかる。まとめると、次のようにいうことができるだろう。

第一に、生徒文化と若者文化をどのように区別し、どのように両者を関連づけるのかという点については、まだ十分な克服がなされていない。大多和の「上層：生徒文化・下層：若者文化モデル」はそれに対する一つの対応と考えることもできるが、上間の研究で指摘されているように、若者文化は学校外部で生成されるだけでなく、学校という場でこそ生成されている側面がある。いいかえれば、大多和のいうように学校が社会化のエージェントとしての機能を低下させていたとしても、生徒たちは依然、学校という場で多くの時間を過ごしており、そこで若者文化が生成されている可能性もあるのだ。このことを考慮すると、諸個人を生徒役割か若者役割のいずれかに割り振るようなモデルではなく、諸個人が両方の役割とどのように向き合っているのかを表現できるようなモデルでなければならない。

第二に、生徒文化の分化について、記述よりも説明に力点を移すなかで、生徒文化の類型が向学校的－反学校的という一元的な図式に単純化されてきたという問題がある。しかし、そもそも生徒文化は複数の次元で整理したほうが精緻に描けるだろうし、1990年代以降に蓄積されてきたエスノグラフィックな生徒文化研究の知見をふまえれば、向学校－反学校という図式は単純にすぎる。したがって、生徒文化を類型化する軸の多元性を確保しつつ分化の原理を解明するにはどのようにすればよいのかということを考えなければならない。

第三に、量的調査と質的調査を組み合わせるということである。このことは、量的研究で見出された相関関係の意味的連関を探る際に特に重要になる。例えば、耳塚や大多和は、質問紙調査で得られたデータから地位欲求不満モデル（成績の低さ→逸脱行動）の適合性を主張しているが、それが相関関係ではなく因果関係であるという確証はない。むしろ暴走族への参与観察を行なった佐藤の研究（1985）や貧困・生活不安定層へのインタビューを行なった西田（1996）の研究をふまえれば、逸脱行動へのコミットが先立っていて、成績の低さはそれに付随しているだけ（逸脱行為→成績の低さ）と解釈したほうが妥当なようにも思える。このことから明らかなように、量的調査と

質的調査を組み合わせることで生徒文化にアプローチすることが重要になってくる。

4. 生徒文化・若者文化を捉えるためのアプローチ

——『文化・階級・卓越化』を手がかりに

1) 『文化・階級・卓越化』のアプローチ

本節では、『文化・階級・卓越化』（Bennett et al. 2009=2017）を参考にして、上記で示した三つの課題に対するアプローチの方向性を示すことにしたい。

『文化・階級・卓越化』についてはすでに森田・相澤（2017）が詳しいガイドとなっているので、ここでは、あくまで生徒文化研究を発展させるためにどのように『文化・階級・卓越化』を「応用できるのか」という観点から、考察していきたい。

『文化・階級・卓越化』は、ピエール・ブルデューの『ディスタンクシオン』（Bourdieu 1979=1990）を手がかりにして、それを現代イギリスに応用した分析を展開している。本書の内容に即して、その分析手順を説明するなら、次のように言えるだろう。

まず、第一部で『ディスタンクシオン』を現代イギリスに応用する意義や論点をまとめたうえで、本書の分析の柱となるライフスタイル空間を構築する。ライフスタイル空間は、特定の文化活動に「関与」する度合いと「嗜好」の程度に関する質問項目（全部で41の設問で、「テレビ」「映画」「読むこと」「音楽」「視覚芸術」「外食」「スポーツ」に関わる設問（p.93））に対して多重対応分析を行うことによって構築される。結果として抽出されるのは次の四つの軸である。すなわち、「関与」と「非関与」の違いを基準とする第1軸、「現代的／商業的な」文化の嗜好と「地位が確立した」文化の嗜好の違いを隔てる第2軸、「内向き」と「外向き」が対比された第3軸、正統的活動を含む文化活動との関わり方の「穏当さ」と「旺盛さ」を分割する第4軸である。そして、その空間に、年齢、階級、教育、ジェンダー、エスニシティといった社会人口学的変数を「補足の変数（サブリメンタリー変数）」として重ね合わせて社会集団とライフスタイル空間の関連性や、諸個人がどのようにマッピングされるのかを確認している。

こうして見出された結果をもとにして、第二部では、「音楽」「読むこと」「視

覚芸術」「メディア」「身体（外食とスポーツ）」というように、各界ごとに分析を展開し、第三部では、ライフスタイル空間と社会人口学的変数、すなわち、階級、ジェンダー、エスニシティとの関係を詳細に検討している。

このように分析を展開する『文化・階級・卓越化』が本稿の関心にとって興味深いのは、とりわけ次の2点である。なお、この2点についても、詳しくは森田・相澤（2017）を参照してほしい。

第一に、回帰分析に典型的に表れるような「従属変数と独立変数もしくは原因変数を区別して『社会的なもの』を定義するのではなく、平面上に配置された実践の關係に焦点を当てることで『社会的なもの』を捉えようとするブルデューの学問的関心」（p.70）を継承し、「關係論的組織化」という観点から分析を行なっている点である。多重対応分析を採用している理由もそこにあり、「多重対応分析を用いれば、文化的嗜好や実践、社会的地位の關係を同一平面上に描き出し、変数間に序列的な因果的従属關係をアプリオリに想定することなく変数の相互作用を分析することが可能になる」（p.71-2）というわけである。

そして第二に、計量的な分析にとどまることなく、多重対応分析で描き出されたライフスタイル空間のなかに位置付けられた個人へのインタビューを通じて、ライフスタイル空間を構成する軸や人々の意味的連関を探っていることである。その際に重要なのは、量的調査で見出されたライフスタイル空間を再確認するためではなく、それを批判的に検討するために質的調査のデータが用いられていることである。このことについては、後述したい。

さて、このような『文化・階級・卓越化』の分析手順を紹介した理由は、この分析手順が、前節で述べた生徒文化研究の残された課題を克服する手がかりになると考えているからである。すなわち、『文化・階級・卓越化』は、「音楽」から「スポーツ」に至るまでの様々な文化活動に関わる変数を用いて、一つの軸だけでなく多面的な軸を想定して空間をつくり、その軸や空間的距離の意味を、インタビュー調査の知見と往還することで検討しているという点で、生徒文化研究の課題を乗り越える可能性を秘めたアプローチといえよう。より生徒文化研究の文脈に引きつけて言うとするれば、1）学校の価値に関わる変数だけでなく若者文化や社会階層に関わる変数を対象にして、2）一元的でなく多面的な軸や空間を作成し、3）質的調査との往還も可能であるという意味で、これまでの生徒文化研究の抱えている課題を乗り越えられ

るアプローチのように思えるのである。

2) 若者文化への適用

最後に、このイメージをより具体化するために、筆者が行なった質問紙調査から得られたデータをもとにした分析を紹介したい。筆者は、2009年から2012年まで大阪府の公立X高校でフィールドワークを行ってきた（知念2018）。このフィールドワーク調査をもとにして、2015年から2016年にかけて筆者はA'ワーク創造館（大阪地域職業訓練センター）と協働でX高校の中退者・卒業者への質問紙調査を行なった。この調査は高校離脱後にX高校の生徒たちがどのような生活をしているのかを明らかにすることを目的とし、2009・2010・2011年度の入学者名簿をもとに質問紙を郵送した。卒業生名簿でなく入学者名簿にしたのは、中退者も調査対象に含めるためである。しかし、672通を郵送で配送したものの、回収できたのは30通でかなり回収率が低い調査となった（その後、私とA'ワーク創造館のスタッフのついでで直接回収した12通を含めて42通となった）。そのため、高校離脱後の生徒たちの生活の全体像を把握するという当初の目的を検討することはかなり困難になったが、3年間のフィールドワークをふまえて質問紙を作成したこともあって興味深い知見を得ることもできた。その一つが、趣味空間の構築である。回収率に課題があり、また、生徒文化について検討するための項目は用意されていないが、それでも具体的な分析のイメージを提供することはできるはずである。なお、ここで示す分析結果は、知念（2016）を多少修正し、再掲したものである。

筆者は、X高校でフィールドワークをしているなかで、X高校の生徒たちが〈ヤンチャな子ら〉〈ギャル〉〈インキャラ〉に分化していることに気づいた（知念2017）。そこで、質問紙調査でもそうした生徒たちの類型を把握できないかと考え、高校時代を振り返って当時の興味関心を尋ねる質問を用意した。その選択肢（複数選択可）とその回答分布を示したのが、表1である。なお、どの項目にも反応していないケースが1ケースあったので、それは除外して分析をしている。

表 1. 高校時代の興味関心の度数分布

度数			%		
			(分母は41名)		
バイク	4	9.8	PCゲーム	5	12.2
筋トレ	10	24.4	スマホゲーム	16	39.0
カードゲーム	2	4.9	ストリートダンス	6	14.6
漫画	16	39.0	アイドル	7	17.1
ライトノベル・小説	2	4.9	Jポップ	16	39.0
ダイエット	2	4.9	Kポップ	8	19.5
サーフィン	1	2.4	ヒップホップ	9	22.0
スノーボード	2	4.9	EDM	5	12.2
ファッション	16	39.0	レゲエ	7	17.1
メイク (化粧)	6	14.6	ロック	4	9.8
YouTube	16	39.0	格闘技	4	9.8
2ちゃんねる	1	2.4	邦画	5	12.2
ニコニコ動画	6	14.6	洋画	8	19.5
テレビゲーム	21	51.2	ラジオ	0	0.0

そして、これらの項目への回答を肯定・否定（1・0）に変換したケース×項目の表に対して対応分析を行った。その結果、抽出された2軸を直交させて構築した空間が、図2である。図2にあるグレーの丸は個人、黒の十字は項目（記載されている文字は項目名）である。第1軸に注目すると、最も右に位置づくダイエットは、ファッションやアイドルと近い一方、カードゲームとは最も遠い距離にある趣味ということになる。また第2軸は上にストリートダンスが位置づき、下に化粧がある。このようにして個々の項目間の関係をみていくと、第1軸は、左にいくほど、「オタク」や「非リア充」と形容されるような趣味が並び、右には逆に流行に敏感な趣味であるファッションやEDMといった項目が並んでいる。日常で使用される用語で言えば、この第1軸は「リア充ーヲタ」の対比だと言えるだろう。それに対して第2軸は、上に行くほど身体的な活動が伴うものになり、下にいくほど「ライトノベル・小説」や「ニコニコ動画」といった「内向き」な趣味になっている。「身体系」と「文化系」を分割する軸といってもいいかもしれない。なおここで分析に使用した項目は、学校の生徒役割に関わるものというよりも若者役割に関わるものである。したがって、この図は、生徒文化を示す空間というよりも、若者文化の空間といったほうがいいだろう。なお、同様の手順によって生徒文化に関わる空間を構築することもできるだろうが、先述したよ

うに本調査にはそれを構築するだけの変数が用意されていないため、それは今後の課題としたい。

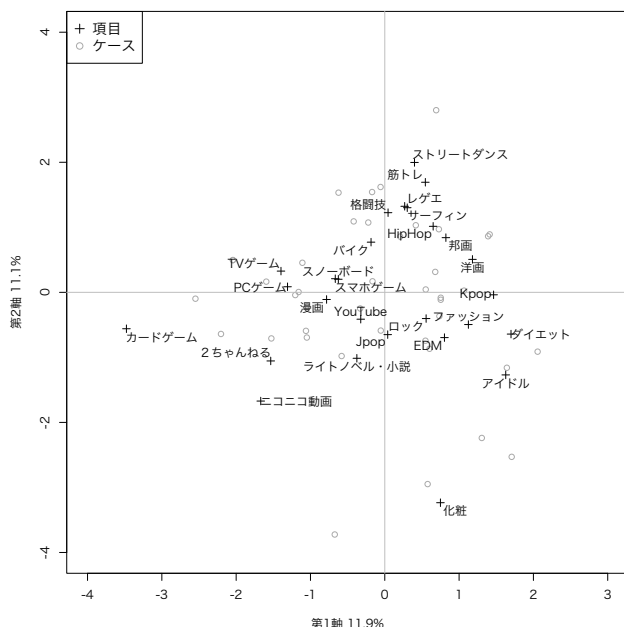


図 2. X 高校の趣味空間

次に同様の空間に、諸個人がどのように分布しているのかをみてみよう。図 2 が項目の分布を目立たせていたのに対して、図 3 は諸個人の分布を読み取りやすいように修正したものである。加えて、『文化・階級・卓越化』で社会人口学的変数の一つとして扱われているジェンダーによって諸個人を識別し、さらに筆者がフィールドワーク調査で対象にした〈ヤンチャな子ら〉のなかの 4 人の位置がわかるようにラベルを貼り付けた。

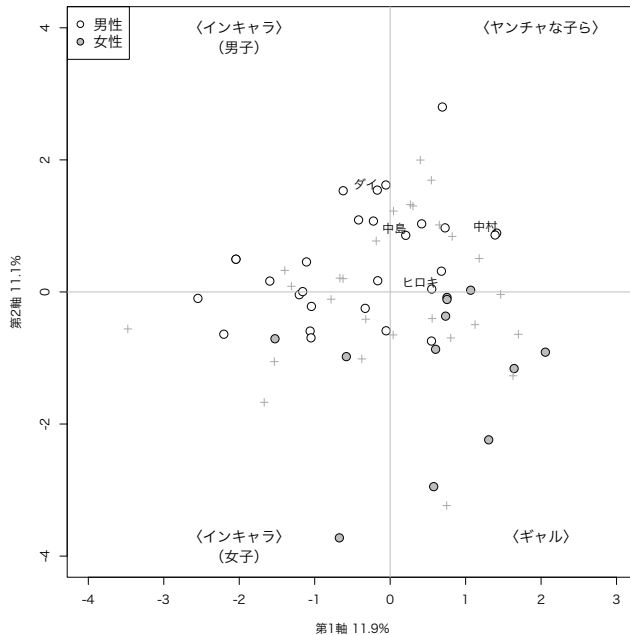


図 3. X 高校の趣味空間 (男女別)

図3をみると明らかに上に男性、下に女性が偏っていることがわかる。このことは、第2軸の分割がジェンダーの分割と重なり合っていることを意味している。そして、筆者がフィールドワークで注目していた生徒たちは、右上に偏って分布している。このように分布しているのは、彼らが図2で右上に位置づく項目（例えばストリートダンス、レゲエ、筋トレ、サーフィンなど）に肯定的に回答しているからである。これらのことを確認していくと、この空間は、筆者がフィールドワーク調査で見出した知見と対応していることがみえてくる。すなわち、右上は〈ヤンチャな子ら〉と呼ばれる男子生徒たち、右下は〈ギャル〉と呼ばれる女子生徒たち、左下は〈インキアラ〉と呼ばれる女子生徒たち、左上は〈インキアラ〉と呼ばれる男子生徒たちだとおおよそ考えることができるのである。

次に、現在の社会的地位を正規職・非正規職・学生・その他に分類し、それぞれがどのように分布しているのかを示したのが図4である。図4をみると、それぞれの地位が様々に分布していて、図3ほどに分布のパターンを見出すことはできない。それでは、このような場合、現在の社会的地位と趣味

空間は対応していないと考えてよいのだろうか。『文化・階級・卓越化』を参考にとすると、そうではない。

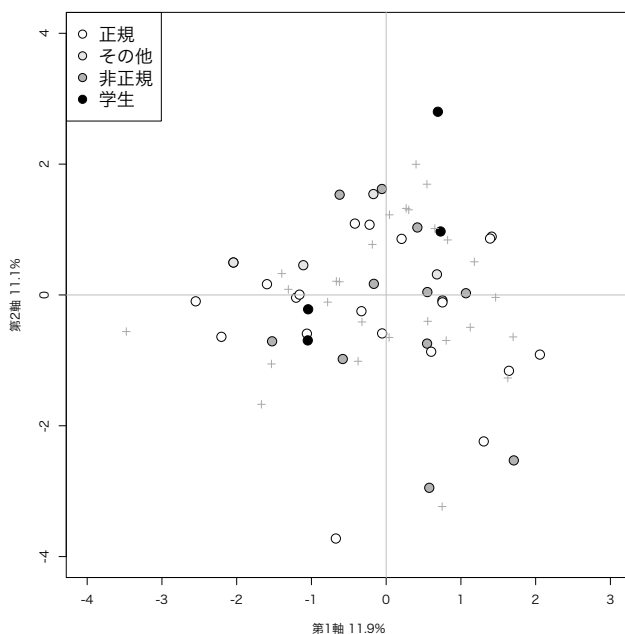


図4. X 高校の趣味空間（現在の社会的地位別）

例えば、『文化・階級・卓越化』の第12章では、ライフスタイル空間において「内向き」と「外向き」が対立する第3軸にしたがって、女性と男性が分割していることを確認し、それをインタビュー・データとつきあわせることで考察を行っている。そこで重要な点は、インタビュー・データを、ライフスタイル空間の妥当性を補強するためというよりは、批判するため、あるいは考察をより深めるために使用している点である。具体的には、男性が支配的である「外向き」の側に現れた女性、女性が支配的である「内向き」の側に現れた男性に着目し、彼ら彼女らがどのように非典型的な実践を行い、それを意味付けているのかを確認している。そのインタビューの結果についてベネットらは次のように述べる（p.423-4）。

われわれのインタビューによって得られた分析結果によれば、「伝統的な女性らしさ」（マーガレットとエディー）から「自律した女性性」（レイチェ

ル)、「オルタナティブな専門性」(セレン、スーザン)、「外向きの女家長制」(ルース)、「上品さ」(サリー・アンとジャネット)にいたるまで、女性の実践にはより多くの型が存在している。これに対して、男性の実践はより明快であり、外向きの男性らしさを強く保持するか(ジョーやジムのように)、あるいは弱く保持するか(ジェームズ、ヴァスデブ、そしてロバートのように)だった。これらの例から一般化することは適切ではないかもしれないが、これらの事例は、公私いずれの世界との関係でも、男性と女性の文化実践の領域には興味深い非対称性があることを示唆している。

つまり、ライフスタイル空間において、稀有な位置にいる人(女性的な位置にいる男性、男性的な位置にいる女性)であっても、男性と女性では、その意味づけ方が異なっているというわけである。

このような分析を参考にすれば、図4をみるだけで一定のパターンが見出せないという結論にとどめてはいけないうだろう。たとえば、「〈インキャラ〉(女子)」と「〈ヤンチャな子ら〉」という対照的な位置に二人ずつ「学生」がいるが、同じ「学生」という社会的地位であったとしても、「学生であること」や「仕事」に対して異なる意味づけをしているかもしれない。たとえ同じ社会的地位であっても、空間上の位置が異なっていれば、その社会的位置に対する意味づけが異なっているかもしれない。また逆に、空間上で同じ位置にいたとしても、社会的地位が異なっていれば、その空間における位置にいることの意味が異なっているかもしれない。このように質問紙調査で得られた知見とインタビューや参与観察で得られた知見を組み合わせながら、考察を深めていくことができるのである。

3) 今後の調査に向けて

以上、筆者が行った調査から具体的な分析のイメージを示してきた。筆者はおおよそ上記のような手順で生徒文化を分析していくことができるのではないかと考えている。改めて整理すると、次のような手順をふむことで、これまでの生徒文化研究の課題を乗り越えることができるのではないだろうか。

第一に、フィールドワークやインタビューによって、中学生・高校生の生活で重要になっている文化項目をある程度把握して、先にみたような若者文化に関する項目に加えて、学校的価値に対する考え方や行動(学校ランクや成績、進路展望、勉強時間など)、社会人口学的変数(家庭背景やジェンダーなど)に関する項目を含めた質問紙を作成する。

第二に、質問紙調査のデータで、若者文化に関わる項目や学校の価値に対する考え方や行動について尋ねた項目を対象にした多重対応分析を行うことで、多次元的な空間を作成する。そして、そこに「補足の変数」として社会人口学的変数を重ね合わせ、空間における諸個人の位置付けと社会的力学の関係を探っていく⁽⁵⁾。

そして第三に、構築した空間の分布をふまえて、生徒集団にインタビュー調査を行ったり、各学校で参与観察を行ったりすることで、構築した軸や空間に対する理解を深めていく。

このような手順をとることによって、生徒文化だけでなく若者文化や社会階層、ジェンダーを分析の視野に収めつつ、向学校－反学校といった一元的な軸ではない多元的な軸を想定した、質的調査と量的調査を有機的に連関させた生徒文化研究を構想できるのではないだろうか。今回分析した調査のデータは、パイロット調査にさえないかもしれないが、『文化・階級・卓越化』を手がかりとしながら、このような設計に基づいた調査を複数の学校で行うことができれば、生徒文化研究は新たな地平を切り開くことができるように思われるのである⁽⁶⁾。

5. おわりに

本稿では、生徒文化研究の動向を整理して、それが抱えている課題を明らかにし、その課題を乗り越えるための方途を『文化・階級・卓越化』を手がかりに探ってきた。冒頭で述べたように、生徒文化研究が蓄積された1970年代に比べると、消費社会化の進行、青年期の拡張、社会階層の影響力の増大といった問題が重なって、生徒の文化圏は複雑になっている。このような複雑な対象をできるだけ単純化せずに捉えようとすることは至難だろうが、本稿で考察してきたように、『文化・階級・卓越化』はそうしたことを可能にする枠組みを提供しているように思える。今後は、本稿で論じたことを実際の調査に生かしていくことが課題となる。

[注]

- (1) 数量化Ⅲ類に用いた20の質問が具体的にどのようなものなのかは、論文に明記されていない。
- (2) 当時はYouthの訳語に「青年」が当てられていたが、近年では

adolescent に青年を、Youth に若者を当てることが多い。そこでここでは「若者」としている。なお、青年文化と若者文化の関係については、難波(2004)に詳しい。

- (3) なお、一つの工業高校で質問紙調査とインタビューを行なった竹内(1995)の研究では、学校ランクで低位に置かれ理論上は反学校の生徒文化の土壌とされる高校で、学年進行にともなってクラブ活動や友達との交流を楽しむという点で学校生活に適応していくことが明らかにされている。その意味で、「向学校-反学校」という一元的な枠組みに回収されない議論を展開している部分もあるが、最終的には、そのような学校生活への適応を「したたかな適応と完璧な冷却」と解釈し、日本型の一元的な選抜システムを温存させる機能だとしている。
- (4) 教育社会学の質的研究の展開については、北澤(2017)と仁平(2017)に詳しい。
- (5) 『文化・階級・卓越化』では、ライフスタイル空間を作成し、そこに社会人口学的変数を「補足の変数」として投入することにより、社会空間とライフスタイル空間の関係性を分析している。しかしながら、社会空間とライフスタイル空間は異なる秩序をもった空間であるはずなのに、『文化・階級・卓越化』の著者らはそれを一つにまとめてしまっているという批判がある(Atkinson, W. 2017)。このような立場に立てば、社会空間とライフスタイル空間をそれぞれ別々に構築し、その相同性(homology)を確認しなければならないということになる。本稿の文脈に引きつけると、若者文化に関する項目と生徒文化に関する項目をまとめて空間を構築し、それに「補足の変数」として社会人口学的変数を投入するのではなく(『文化・階級・卓越化』にならえばこのような分析手順になるが)、若者文化空間と生徒文化空間と社会空間をそれぞれ別々に構築し、それらの空間間の相同性を確認しなければならない、ということになる。社会空間とライフスタイル空間の相同性を検討した日本の研究として近藤(2011)がある。なお、筆者は別稿(知念 2018)でメディア・ストリート空間、学校空間、社会空間の力学を重ね合わせるアプローチの重要性を指摘した。その際は、フィールドワーク調査を念頭に置いたものであったが、社会空間とライフスタイル空間の相同性を計量的に検討することは、そうしたアプローチに質問紙調査を組み合わせて拡張させたものと考えてよいだろう。

（６）多重対応分析によって生徒文化の構造を探るという営みは、近年の生徒文化研究よりも、1970年代に蓄積された数量化Ⅲ類を用いた分析に近い。数量化Ⅲ類によって若者を類型化する試みに初めて取り組んだのは、武内ら（1982）によれば、門脇（1971, 1978）だという。非常に興味深いことに、実は、門脇の分析は『文化・階級・卓越化』の分析手順と重なりがある。門脇（1978）は、15～29歳を対象にした「東京都青少年基本調査」のデータを使って、価値観に関する項目に数量化Ⅲ類を行い、「社会規範同調－社会規範非同調」という軸と「外向（活動的）－内向（非活動的）」という軸を抽出した。そして、それにクラスター分析を行い、「コツコツ青年」「ふわふわ青年」「イライラ青年」「ゆうゆう青年」という四つの類型を取り出し、その類型とジェンダー、年齢、家庭背景といった変数の関わりを確認している。さらに、「心情告白」という形式で、それぞれの類型の青年たちの物語を創作している。その意味では、『文化・階級・卓越化』を手がかりにして生徒文化研究を構想することは、黎明期の青年文化の研究に数量化Ⅲ類の方法を適用した門脇の構想と重なっているのかもしれない。また、数量化Ⅲ類を使った生徒の分析としては、阿形（1992）も興味深い。阿形が依拠する林知己夫の「考えの筋道」（林 2011 など）という考え方は、ブルデューの「関係論的組織化」と通ずる部分があり、その相違点について確認する作業も重要になるだろう。

〔参考・引用文献〕

- 阿形健司, 1992, 「「少数派」の存在場所誰が勉強から降りてしまったか」『教育社会学研究』(50), pp.345-65.
- 麻生誠, 1979, 「高等学校教育の発展と高等学校研究の展開」『教育社会学研究』(34), pp.64-78.
- Atkinson, W., 2017, *CLASS: IN THE NEW MILLENNIUM*, Routledge.
- Bennett, T., et al., 2009, *Culture, Class, Distinction*, London : Routledge. (=2017, 磯直樹・香川めい・森田次朗・知念渉・相澤真一訳『文化・階級・卓越化』青弓社.)
- Bourdieu, P., 1979, *La distinction: Critique sociale du jugement*, Paris: Les Editions de Minuit. (=1990, 石井洋二郎訳『ディスタンクシオン——社会的判断力批判Ⅰ・Ⅱ』藤原書店.)

- 知念渉, 2012, 「〈ヤンチャな子ら〉の学校経験: ——学校文化への異化と同化のジレンマのなかで——」『教育社会学研究』(91), pp.73-94.
- , 2016, 「生活困窮リスクの高い高校中退者等の実態調査」, A`ワーク創造館編『生活困窮リスクの高い高校中退者等の実態調査及び再チャレンジ支援モデル事業』, pp.5-23
- , 2017, 「〈インキャラ〉とは何か: 男性性をめぐるダイナミクス」『教育社会学研究』(100), pp.325-45.
- , 2018, 『〈ヤンチャな子ら〉のエスノグラフィー: ヤンキーの生活世界を描き出す』青弓社。
- 土肥いつき, 2015, 「トランスジェンダー生徒の学校経験: ——学校の中の性別分化とジェンダー葛藤——」『教育社会学研究』(97), pp.47-66.
- 林知己夫, 2011, 『調査の科学』筑摩書房。
- 樋田大二郎・荻谷剛彦・堀健志・大多和直樹編, 2014, 『現代高校生の学習と進路——高校の「常識」はどう変わってきたか? ——』学事出版。
- 伊藤茂樹, 2002, 「青年文化と学校の90年代」『教育社会学研究』(70), pp.89-103.
- 門脇厚司, 1978, 「現代青年の類型と行動特性」吉田昇・門脇厚司・児島和人編『現代青年の意識と行動』日本放送出版協会, pp.206-40.
- 北澤毅, 2017, 「教育社会学における質的研究の展開」日本教育社会学会編『教育社会学のフロンティア1 学問としての展望と課題』岩波書店, pp.127-44.
- 児島明, 2006, 『ニューカマーの子どもと学校文化』勁草書房。
- 近藤博之, 2011, 「社会空間の構造と相同性仮説——日本のデータによるブルデュー理論の検証——」『理論と方法』(26), pp.161-77.
- 松原治郎・武内清・岩木秀夫・渡部真・耳塚寛明・荻谷剛彦・樋田大二郎・吉本圭一・河上婦志子, 1981, 「高校生の生徒文化と学校経営(1)」『東京大学教育学部紀要』(20), pp.21-57.
- 耳塚寛明, 1980, 「生徒文化の分化に関する研究」『教育社会学研究』(35), pp.111-22.
- 宮本みちこ, 2004, 『ポスト青年期と親子戦略——大人になる意味と形の変容——』勁草書房。
- 宮崎あゆみ, 1993, 「ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス: 女子高におけるエスノグラフィーをもとに」『教育社会学研究』(52), pp.157-77.
- 盛満弥生, 2011, 「学校における貧困の表れとその不可視化: 生活保護世帯出

- 身生徒の学校生活を事例に」『教育社会学研究』（88），pp.273-94.
- 森田次朗・相澤真一，2017，「『文化・階級・卓越化』を読む 社会調査の方法として蘇り、更新されるブルデュー」『現代社会学部紀要』（11），pp.81-138.
- 難波功士，2004，「『若者論』論」『関西学院大学社会学部紀要』（97），pp.141-48.
- 仁平典宏，2017，「アイデンティティ概念の構築主義的転回とその外部」日本教育社会学会編『教育社会学のフロンティア1 学問としての展望と課題』岩波書店，pp.211-34.
- 西田芳正，1996，「文化住宅街の青春——低階層集住地域における教育・地位達成——」谷富夫編『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社。
- 野村哲也，1967，「都市高校生の生活態度と価値観：その分化と学校差」『教育社会学研究』（22），pp.70-88.
- 大多和直樹，2001，「『地位欲求不満説』再考：上層：生徒文化・下層：若者文化モデル試論」『犯罪社会学研究』（26），pp.116-40.
- 佐藤郁哉，1984，『暴走族のエスノグラフィー——モードの叛乱と文化の呪縛——』新曜社。
- 白石義郎，1976，「『生徒のサブ・カルチャー』再考：パラダイムによる理論化への試論」『教育社会学研究』（31），pp.153-62.
- 武内清，1981，「高校における学校格差文化」『教育社会学研究』（36），pp.137-44.
- 武内清・荻谷 剛彦・浜名 陽子，1982，「学校社会学の動向」『教育社会学研究』（37），pp.67-82.
- 竹内洋，1995，『日本のメリトクラシー——構造と心性——』東京大学出版会。
- 上間陽子，2002，「現代女子高校生のアイデンティティ形成」『教育学研究』（69），pp.367-78.
- 内田康弘，2016，「サポート校生徒と大学進学行動：——高校中退経験者の「前籍校の履歴現象効果」に着目して——」『教育社会学研究』（98），pp.197-217.
- 渡部真，1982，「高校間格差と生徒の非行的文化」『犯罪社会学研究』（7），pp.170-85.
- 米川英樹，1978，「高校における生徒下位文化の諸類型」『大阪大学人間科学部紀要』（4），pp.183-208.